

## 【調査報告】

# ウイーン市における幼稚園教育の現状

田 口 鉄 久

## はじめに

我が国において幼児教育・保育制度改革の新たな動きが始まった。恒久財源を確保し、平成27年度実施を目標に新たな子ども・子育て支援体制への準備が進む。幼児教育・保育関係者が特に注目する改革は長く論議されてきた幼稚園・保育所の一体化である。従来の認定こども園法を改正したことによって現在の保育所・幼稚園の多くが、財源の一元化政策で認定こども園へ誘導されることになる。現行の助成制度も残すため、幼稚園・保育所も存続するが、ここ数年のうちに新たな認定こども園が急増すると思われる。実施に至る過程では相当な論議と準備が必要であり、新制度への移行にあたっては戸惑いや混乱も予測される。

このような幼児教育・保育の変革期、新たな発想で幼児教育の方法、内容、運営を考えることが求められる。その一つに海外の幼児教育・保育の実態が参考になる。今回ウイーン市の幼稚園の状況を調査する機会を得た。調査報告としてまとめ、幼児教育・保育充実のための新たな視点を探りたい。

## I. 調査の目的

ウイーン市の幼稚園は保育所の役割も併せ持っている。今回の調査ではいくつかの異なるタイプの幼稚園を訪れ、その特徴を把握するとともに、日本の幼稚園・保育の現状と比較・検討する。また、幼稚園教員養成校を訪問して、そこで行われる教育を参観し、担当者から話を聞く。これらの調査をふまえて、

我々の行う幼児教育・保育が充実するための保育方法・内容・園運営のあり方を検討する。

## Ⅱ. 調査方法

調査期間は平成24年3月20日～23日の4日間、ウイーン市（オーストリア）で6幼稚園と1幼稚園教員養成校の調査を行う。別途市役所幼稚園担当者を訪問し挨拶を行う。

訪問する幼稚園・機関等は次の通りである。

20日（火） ペダゴギック幼稚園教員養成校（Pädagogik）と附属幼稚園（Familiengruppe）

同 ライフ私立幼稚園（Kindergarten LIFE）

21日（水） シュバイツァー障害児教育幼稚園（Sonderkindergarten “Schweizerspende”）

同 ホルト学童保育幼稚園（Hort Kindergarten）

22日（木） キンダーハウスモンテッソーリ幼稚園（Kinderhaus）

同 市役所幼稚園担当者訪問（挨拶）

23日（金） ウイーン市立幼稚園 Kindergarten

なお、本調査を行うにあたって、事前調整、案内、通訳をお願いしたのは哲学研究者である元三重大学ドイツ語教師フリードリッヒ・ミュレッカー博士（Dr.Friedrich Mühlöcker）とチエコ・ミュレッカーさんである。

いずれの幼稚園・機関でも両氏もしくはチエコさんに同行してもらい、通訳をお願いし、見学および聞き取り調査を行った。

調査結果を幼稚園6園（訪問順）、養成校1校の順で記述する。その後特徴を8項目あげ、考察する。

本調査は平成23年度の皇学館大学海外研修旅費の支給を受けたものである。

### Ⅲ. 調査結果

#### 1. ペダゴギック幼稚園教員養成校附属幼稚園

##### (1) 訪問日程, 対応者

参観日程は2012.3.20日, 11:00~12:00であった。

園長はMag.Dr Brigitte Cizekさんで幼稚園教員養成校校長を兼ねる。案内は幼稚園担当教員であった。

##### (2) 園の概要

3・4・5歳の異年齢混合 (Kindertagengruppe) が4グループと小さな子 (Krippe) の1グループから成る。3・4・5歳のグループはそれぞれ25名程度で、2人の教員と実習生 (1~2名) が指導にあたる。小さな子のグループは午睡中であった。



Kindertagengruppeの入室



Krippe (小さな子の部屋) 午睡中

ペダゴギック附属幼稚園は、ウイーン市内の多くの幼稚園がそうであるように、小さな子から大きな子まできょうだいのように生活することをめざす“ファミリアグループ (Familiengruppe)”である。午後になると6歳から10歳の小学校児童も幼稚園へやってくる。昼食を食べて、園児と共に過ごす。幼稚園児も昼で帰る幼児がいるので、人数が増えるわけではない。これらのグループは午後になると3歳から10歳の子が過ごすグループになる。

それぞれに所属グループはあるが、遊び (生活) はどこで行ってもよい。そ

の場合、自分の行き先はグループ（4つのKindergartengruppe及び一つのKrippe）やいくつかの遊び場所の写真の上に自分の名札を貼り付けて表示する。



グループ、遊び場の写真と氏名表



黒の部屋

部屋には共同性を引き出す各種遊具（カプラなどの構成遊具、木製自動車と道など）がある。また幼児の制作した作品も飾ってある。

リラックスできる空間もある。一段高いクッション性のコーナーを作り、そこに集い、寝そべることのできるソファなどもある。また、各グループはそれぞれ特色をもたせている。閉ざされた安らぎの部屋として小さな“黒の部屋”をもつグループ、“白の部屋”をもつグループ、“家庭遊び（ママごと）の部屋”をもつグループなどがある。

## 2. ライフ幼稚園 (Kindergarten LIFE)

### (1) 幼稚園の概要

2009年事業家の寄付によって施設・敷地を貰い受け、Ma<sup>g</sup>. Gabriele Pointstingl 園長が幼稚園を開設した。

LIFEはLeben Individualität Familie Erwerbstätigkeitの頭文字をとったもので、“家庭的な生活を通して個性を育て将来につなげる”教育をめざす。

案内・説明は園長のGabriele Pointstinglさん、懇談・参観日程は2012.3.20、14:00～15:30であった。

## (2) 教育の概要

1歳から3歳までの子どものグループはおやつの時間であった。4グループあり、平均15人の子どもを2人の教員が担当する。

その後、部屋（柔らかい材質のブロックや遊具で囲われた空間）で自由に遊ぶ子どもの姿があった。保育室には感触を楽しみ、感覚を育てるものとして、“コルク栓”（ワインなどのボトルの栓／廃品），“大きめのアズキ”（穀物）を入れた大きなタライのような容器があり、手を入れたり、中のものをすくったり、落としたりできるようになっていた。別の園では“お米”を使っていたところもあった。自分を等身大に映す鏡もあった。イースターを迎える時期でもあり、それぞれクラスの特徴をもたせた入れ物（かご）が作ってあった。



おやつのとあと囲われたスペースで遊ぶ



アズキが入った大きな容器

あるグループの3歳ぐらいの子どもが10人ほど、教員と共に園庭に設置されたパオのような建物の中へ入り、輪になって座った。その後教員は1～4個の黒点を描いたカードを何枚か準備して、幼児に一枚ずつ渡した。幼児はそれを数の順に並べた。教員はバックのような袋を差し出し、手探りで中に入っているものを取り出させた。

犬のぬいぐるみを取り出した幼児は、“HUND”と言って、それを1つの点が描いてあるカードに乗せた。次の幼児はフェルトで作ったバナナを取り出した。“BANANE”と言って、教員と相談しながら3つの点が描いてあるカードに乗せた。かなり高度な言葉の学習に見えたが、このような方法でかなり早くから音節に関する感覚を育てている様子を参観した。



園庭に設置されたパオ風の家



その中で言葉遊びをする幼児

4歳のクラス、5歳のクラスがそれぞれ一クラスある。これらは25人で一クラスになっている。教員は各クラス3人いて、そのうちの一人は英語のみを話す教員である。一クラスの中で二ヶ国語が交わされる。

午後であったので、18人ほどの幼児が残っていた。

### (3) 教育方法について (以下園長との懇談)

教員は子どもが興味を持ったことを指導する。イースターやクリスマスなどの行事以外では、クラスあるいは園全体で一斉に活動に取り組むことはほとんどしない。

1週間のうち2回は他のグループ(クラス)へ移って生活できるようにしている。その時はそれぞれの部屋にある各グループ(クラス)を写真で表示したボードに自分の名前を書いたマグネットを置いて、移動する。教員はその幼児がどこにいるのか把握できる。子どもを自由にさせることで、自分から表現できるようにしている。

### (4) 課題のある幼児について

注意力散漫な幼児であっても一箇所に留まることができるようになると、成長がみられる。母親とコンタクトのとれなかった幼児でも、幼稚園で十分関わっていくなかで、問題のある子としてとらえなくてもよくなってきた例がある。

グループ（集団）から出てしまう幼児は無理をして入れ込むのではなく、出ることを認める。中には（死角になった小部屋や隙間などに）隠れている子もいるが注意をすることはしない。



イースター用の手提げバック



Mühlöcker 氏, Poinstingl 園長, 筆者

#### （5）研修，園経営について

細かな指導計画は立てない。教員に任せている。教員は土曜日の自由時間に自主的な研修を行っている。年2回は集中的に研修を行う。大学で専門の教育を受けた人を中心にして、補助の教員が協力する体制になっている。

食事は外部発注であるが、提供者とは十分話し合いを行っている。

### 3. シュバイツァー障害児教育幼稚園（Sonderkindergarten “Schweizerspende”）

#### （1）訪問日程，対応者

障害のある幼児と健常の幼児が共に生活をする幼稚園（Integration Heilpädagogische Gruppe）であった。

広々とした公園敷地内に建ち、約150人の3～6歳の幼児および約50人の教職員がいる。

案内・説明は副園長もしくは主任と思われる方であった。

参観日程は2012.3.21, 9:30～11:00, 幼児の写真は撮ることができない。



障害を持つ子の幼稚園（管理棟）



公園内にある幼児棟（各棟独立）

## （2）園の概要

9グループがそれぞれ独立した部屋をもつ。重症幼児のみの1グループは9人構成で、3人の教員が1対1の指導を行う。状況が良くなった場合は他のグループに移る。8グループは16～18人で構成される。それぞれのグループには障害児教育の専門教員1名と補助教員2名がいる。別に心理療法士2名、言語聴覚士1名がいる。また週2回訪れる医師もいる。

8グループにはそれぞれ障害を持つ幼児が1/3いる。自閉症の幼児、コンタクトのできない幼児、肢体不自由の幼児などである。これらの幼児は市内全域から来ているが2/3にあたる健常の幼児は地元の幼児である。



構成遊びのコーナー



自由に取り出すことのできる遊具・教具

部屋は机を少なめにして、幼児は自分でおもちゃを持ってきて好きなように遊ぶことができるようにしている。



### (3) 施設の概要

保育室は廊下でつながったコテージのように各グループが独立していて、それぞれ教育に必要な施設、小部屋がある。またグループで集うことのできる庭もある。庭はその先で全ての園児が交流できるような広場になっている。天気の良い日には庭で食事をとることもある。恵まれた教育環境の施設である。

建物は1946年にスイスの教育者によって“障害のある子を人間性をもって育てる”という精神で設立され、ウィーン市へ寄付された。文化財としての指定を受けるほど重厚な建物である。



園庭側から見た保育室



グループが生活をする部屋

保育室には様々な感触を味わうことのできる教具、遊具がある。保育室とは別に療育の部屋も多様にある。体で感覚を感じながら機能を発達させる遊具などが準備された療育室、ボールプール、言語療法の部屋、温水で心と体をリラックスさせる広々とした温泉のような療育プール、ウオーターベッド・音楽・光と色で癒しを与えるスヌーズレンの空間、リズム表現・運動のできるフラットな部屋などがありよく整った施設である。



温水の療育プール



ウオーターベッドと光の空間

#### (4) 教育の様子

あるグループは春を呼ぶ行事を行うために自分たちで作った花（作品）を手にして教員と共に庭へ出て行くところであった。

他のグループの部屋では教員と幼児5人ほどがカードめくりゲーム（同じ図柄をとる／教師手作り作品）をしていた。またレールを組み合わせ小さな電車を走らせる遊びをする幼児、イースターを迎えるため中味を取り除いた玉子に色塗りをする幼児がいる。これらの遊びの様子は、隣接の一方視の窓（one way mirror）から他者が観察することもできる。

一部の幼児は他の教員と共に機能訓練の部屋へ行って療育を受ける。

#### (5) 保護者相談、打ち合わせ、研修

管理棟2階にはいくつかの相談室がある。火曜日の午後に保護者の相談を受けるシステムがある。小児科医師、心理療法の専門家が対応する。

ミーティングルームでは、職員の打ち合わせを行う。ウイーン市の職員として市のプログラムに沿って毎月具体的なプログラムを組む研修を行う。

障害のある子どもの情報は心理療法担当者から入ってくる。

障害児教育の初心者コースの研修があって、ここの園の教員も他の園からくる教員と共に研修に参加する。指導に当たる講師はあらかじめテーマをあげて募集をし、応募してもらった人である。〇〇について研修をしたいので・・・と呼びかけ、大学、専門機関、学校の先生に担当してもらう。

## (6) 障害幼児と健常幼児の関係

健常児に対しては、個人の才能を見つけるように対応する。言葉の学びをチェックして、良いところを伸ばしていく。補助教員も子どもをよく見ている。一般的にはグループの全員に対して同一指導をすることはない。

障害を持つ子からの健常児の学びとしては、一緒に遊び、目を配り、社会性を身につけていく。靴紐を結んでやる、食べさせてやるなどして、優しくすることを学ぶ。

約2/3を占める健常児の保護者は障害を持つ子と共に過ごす生活に対してどのような考えを持っているのか尋ねたところ、回答は以下の通りであった。

- ① 両親はあらかじめ自分の子が障害を持つ子と共に生活することを理解して入園させている。様々な子と過ごすことによって優しさが培われる。
- ② 本幼稚園は教員の質も高く、施設・設備も充実していて、入園希望が多い。
- ③ 両親とは話し合いを行っている。



機能・感覚を育てる遊びの部屋



幼児の作品（指絵、ぬたくり表現）

## 4. ホルト幼稚園 (Hort Kindergarten)

### (1) 訪問日、案内

“午後からの小学校児童と就学前の障害幼児のための幼稚園”である。上階にある小学校を終えてから来る6～10歳の児童と、次年度小学校へ入学するための準備教育として障害幼児を受け入れる。学童保育+障害児保育の幼稚園である。2グループある。

説明は園長先生であった。観察・説明の日程は2012.3.21、15:30～16:30で

あった。本園での写真撮影は認められていない。



市立幼稚園の表示



園長と通訳のチエコ Mühllöcker さん

## (2) 教育の概要

1 グループの人数は21人で、その中に小学校へ上がる前の障害幼児4人が含まれる。これらの障害児は事故にあった子、感覚の弱い子、言葉に障害がある子などである。

12:00に昼食、17:30に夕食をとる。子どもは学校の宿題をする。教員に相談があれば一緒に考えることもある。寝転んだりして自由に過ごせるスペースをつくっている。

教員は幼稚園教育、小学校教育の資格のある人で子どもの弱い面を援助していく。

他のグループで過ごしたい時は行き先を名札で示し、教員に行き先を告げてから行く。子どもは家族のような関係になる。

費用は両親の収入によって異なる。収入の少ない人は(食事代も含めて)支払わなくても良い。

給食は3つのメニューが利用できるようになっていて、図で表示してある。通常食、豚肉を入れない食事、野菜食がある。

HORTは教育でもあり、福祉でもある。障害を持つ幼児の受け入れの決定はウィーン市が行うので、現在どの程度の入園希望者がいるのか、待機している幼児がいるのかは園では分からない。



一般食，豚肉除去食，菜食の分類配膳

### (3) 教育計画と記録

共同の活動については Plan がある。年間計画と2ヶ月の計画をたて、各月・週に行う行事などを表す。Plan はあるが、教員は子どもの様子を見て、柔軟な取り扱いをする。イースターのものを作ったり、料理をしたり、種まきをするなどの計画を立てる。計画は一つだけけれども、大きい子と小さい子が協力し合って行く。日々の記録は各教員が残す（A4用紙1/3程度の分量）。

教員は毎月その記録を参考にして、まとめの話し合いを行う。また保護者にも伝える。

小学校と幼稚園の基本計画に沿って教育を行う。

教員は昼からの勤務であるが、問題に取り組む場合は11時ごろに来る。責任者（園長）は朝から勤務し、教員の記録を読み、準備に当たる。

### (4) 子どもの活動の様子

一人の子は、いくつかの試験管を立てて、スポイドで色水を落とし、混色遊びをする姿があった。

建物で囲われた空間が運動場になっている。広さは25m×25mぐらいでそれほど広くない。そこでボール遊びや体を動かして遊ぶ児童の姿があった。

## 5. キンダーハウス幼稚園 (Kinderhaus)

### (1) 訪問日, 対応者

モンテッソーリシステムによる私立幼稚園であり, “混じりあって社会性を身につける幼稚園”を教育の基本とする。

2012.3.22, 10時~12時, 対応は園長の Ulla S. Monfared さんであった。



モンテッソーリ教育の幼稚園 (表示板)



保育室の様子

### (2) 教育の概要

2グループあるが, 部屋の大きさなどの関係で, 一つのグループは14人, もう一つのグループは20人の構成。いずれも3~6歳の幼児の異年齢で構成される。

人数の少ないグループは担当教員と補助教員で教育する。多い方のグループは2人の教員で行う。教員はいずれも幼稚園教員の資格のうえに, 3年間モンテッソーリ教育を受けた者。

キンダーハウス幼稚園は自然派, 環境保護を重視する人々が緩やかな連携の共同体 (アルテナ共同体) を形作り, アパート群の中で生活している。食事ができる店, プール, 劇場なども備える。店では無農薬の自然食品や鮮魚 (川魚) などが取り扱われている。いわゆる産直販売も行われている。

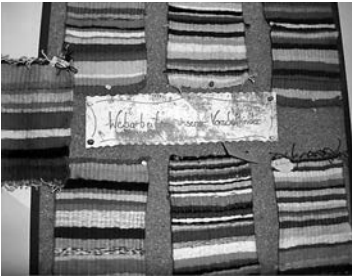
当初は共同体構成員のための幼稚園であったが, 子どもの数も減少したため現在では近隣の子どもの利用もできるようにしている。登園した幼児は各自で朝のおやつ (または朝ごはん) のオートミールもしくはシリアルなどを食べてから活動に入る。

### (3) 教育の内容

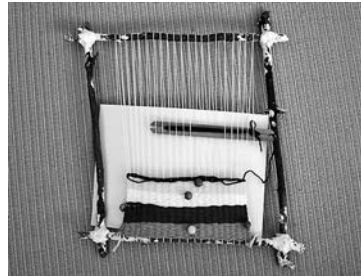
教育内容は本格的なモンテッソーリ教育で、保育室内には各種モンテッソーリ教具が整えられている。幼児は自分（たち）の遊びたい教具を一人または数人で持ち出して遊ぶ。教員も適宜個人またはグループの活動を見守り、時に一緒に行くなどの支援をする。

教師の声は通常の会話程度、もしくはそれよりも抑え気味の静かな語りかけである。

様々な色の毛糸をつないで織物を織る幼児、色鉛筆やクレパスで絵を描く幼児、イースター用の玉子（の殻）に模様をつける幼児、教員と一緒にカードの絵合わせをする3人の幼児の姿などがみられた。カードの絵は教員の手作りで、イースターの玉子が描いてある。同一模様の玉子の絵を2枚ずつ、それを多数組作って、裏面に置き、めくって同じ模様を揃える遊びである。



幼児が制作した小さな織物



制作中の織物

一人でマグネット棒を組み合わせて幾何学的な模様・デザインづくりに取り組む幼児、色のついた小さな直方体の木片を組み合わせ、立体にして遊ぶ幼児、あるいは疲れたのか、ソファーに一人で寝転ぶ幼児もいた。2人の子ども（当番）は昼食用の食器をテーブルに配置していた。



教員の弾くギターに合わせて歌う



女兒が描いていた絵

これらの活動は10時30分ごろには区切りをつけ、10時30分ごろから全員で取り組む活動が始まった。教員はギターを弾き、皆で♪“ゲーテンモーゲン、ゲーテンモーゲン・・・”と歌で交流した。2曲歌った後、絵本の読み聞かせを行った。絵本は常に幼児に見せているわけではなく、適宜見せていた。3～6歳の幼児がいるにもかかわらず、皆落ち着いて聞いていた。読み終えた後、話が始まった。小さな子も自分の思いを伝え、周りの幼児もよく耳を傾けていた。



モンテソーリ遊具を並べた棚  
(玉子の殻は乾いた草の上に乗せてある)



各種ボタン、コルク片など  
(遊びには廃材も活用する)

半数の幼児が各種マラカス風の楽器を持ってきて、教員のギター曲に合わせて、皆で優しくうたいながらリズムをとった。後に半数の幼児と交代する。教師は歌と合奏を終えた後もギターの曲に合わせてるようにして、子どもに語りかける。

その後、幼児は施設内のプールへ行った。



#### (4) 保育室環境について

アパートの一隅を利用した園のため、必ずしも恵まれた環境ではなかったが、その中でも様々な工夫が見られた。

幼児は保育室に4つ配置された机(4人用)で、あるいは床面より30~40cm高くしてござ風のカーペットを敷いた床で、自分たちの好きな遊びを行う。

保育室後方にはさらに高くなった、囲われた空間(2段ベッドの上部のような場)が2箇所あった。一つはままごとができるキッチンが備え付けられた部屋、もう一つはクッションを置いたくつろぎの部屋であった。



一段高くなった部屋(階段下は隠れ家)



一段高くなったままごと空間

壁には幼児の小さな作品が額に入れて飾ってあった。

イースターを迎えるための飾りは教員によって様々な工夫がなされていた。

#### (5) 施設長との話

授業料は食事代込みで100ユーロ(長時間児は120ユーロ)であるが、別途ウィーン市から園へ一人当たり256ユーロ配当がある。

幼児は自分たちのしたいことをする。教員は子どもの自立を促すために手伝いをする、という姿勢で臨んでいる。

園庭は無いので、毎日公園で遊んだり、プールで泳いだり、週1回は森へ出かけたりする。外での活動は、絵を描いたり、花を育てたり、道をきれいにしたり、生き物にえさをやるなどをする。

室内環境はピンク、黄色、オレンジなど柔らかな色彩にする配慮があった。



保育室を飾る（1）



保育室を飾る（2）

担当の教員は15年の経験を持つ。各教員はそれぞれ自分の特徴を出している。教具はいろいろなものを工夫して取り入れるようにしている。教師の研修は個人がセミナーへ出て学ぶ。研修は個人に委ねられている。障害のある幼児の受け入れは、部屋も限られ階段もあるので、行っていない。

## 6. ウィーン市立幼稚園（Kindergruppe）

### （1）訪問日，対応者

1997開設の幼稚園，園長は Mag. Elfriede Rosenberger さん，懇談・参観日程は2012. 3. 23，10：00～12：00であった。幼児の撮影はできない。



幼稚園玄関



Rosenberger 園長と筆者

## (2) 園長との懇談内容

保育時間は6時から18時になっているが、現在の利用者は6時30分から17時30分までである。

0～3歳が2グループ(各15人)、で一人の教員と一人のアシスタントが担当する。3～6歳も2グループ(各25人)あり、各クラス一人の教員と一人のアシスタントで担当する。

午後にはファミリアグループ(Familiengruppe)となり、学校から来る24人の児童が上記グループに分かれて入る。



好きなグループ・場所で過ごす場合の表示



保育室階上の小部屋

一部の幼稚園児は午後も引き続きファミリアグループで過ごす。

小学生は昼食もこのファミリアグループで食べる。なお小学生の午後の生活は将来は学校で行うことが検討されている。そうなるこのシステムはなくなることになる。

食事代の50ユーロ以外は全て無料。

出産後子どもを育てながら再就職する場合、半日の仕事を選ぶことのできる社会になっている。

夏休みもオープンしているが、利用者が少ないため、3歳未満1グループ、3～6歳1グループに縮小している。

いろいろな国(スーダン、フランス、フィリピン、中国など)の子がいるため、幼児期の教育は大切である。ここでは、ドイツ語の教育を大切にしている。グループを超えて子どもを集めてドイツ語の教育をする。子どもはいろいろな

国の言葉を知ることができてよい。

グループで行う教育は各々の教員に任されている。

健康、運動に関することなどは全体のプログラムに入れている。

自分で経験することが大切である。指導するというのではなく、子どもの弱い面は援助する。また子どもの強いところ（才能）が見えたときには、さらに伸びるように支援する。

### （3）保護者との関係

子どもの成長には両親の教育観が重要であり、それを支援するのが幼稚園の教育である。

今どんな歌をうたっているのか、連絡をする。



石に描いた作品



保護者向けの連絡用紙入れ（手作り）

### （4）教育内容（参観）

スポイドで絵の具を吸い取り、紙コップの上に置いた紙に落とし、にじみの模様を作って楽しむ幼児がいた。化学実験を行っているかのような慎重な姿であった。出来上がった紙は乾かした後、何かの作品に貼り、模様にするように思えた。

教員と3人の幼児がサイコロゲーム（すごろく遊びとほぼ同じ）を行っていた。成功すると小さなおやつ（マール）をもらうことができ、それを食べながら遊んでいた。遊びながら数の理解を促している。



玉子の殻を色のフェルトで薄く包んだもの



筒をデザインする

テラスではフープ、引き車で遊ぶ幼児も見られた。

園庭は広くないが、タイヤを利用して作ったブランコ、総合滑り台、東屋風の屋根付きベンチ、砂遊び場があり、そこで遊ぶ幼児の姿が見られた。また、三輪車に乗ったり、乳母車を押すことのできる周囲の道なども整備されている。

冬の期間や、雨が降ったときなどは広いホール（遊戯場）で遊ぶ、雪の中で遊ぶことも多いという。

ホールの使用は一日交替にしている。リトミックや体操を行う。



ホ ー ル



午睡の準備がされている保育室

また、ホールでは小学校入学を控えた幼児を対象に、昼頃に生物、言葉、数、英語の勉強を一日1時間ほど行う。

学校との連絡は、小学生が来ていることもあり、日常的に校長・園長が話し合っている。

担任は個人の情報を細かく小学校へ伝えることはしていない。(個人情報の関係)

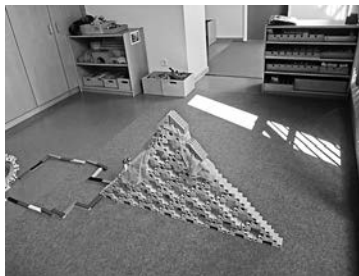
けんかや衝突場面の解決は子どもに委ねるが、解決が進まないときは教員が支援する。

ありがたいことに怪我は少ない。怪我を負った場合は担当者一人が病院へついでいき、保護者へ伝える。

### (5) 保育環境

各保育室はいくつかに区切られた空間が入り組んでいる。例えば階段下へ潜り込んで隠れることができたり、押し入れのような閉ざされた空間であったり、2段ベッドの上部、下部の部屋であったりして、一つの部屋でありながら多様な遊び空間が準備されている。

各部屋には同じような教具が揃っているが、それぞれに特徴をもたせ、造形・美術(色遊び、毛糸の織物、編み物など)遊びができる部屋、ままごとのできる部屋、コンピュータ作業のできる部屋、木製遊具(各種小型積み木)で遊べる部屋…というように教員の考えを反映させた特徴を持たせている。



各種木製遊具のある階上部屋



囲われたリラックス空間

## (6) 幼稚園教員の待遇

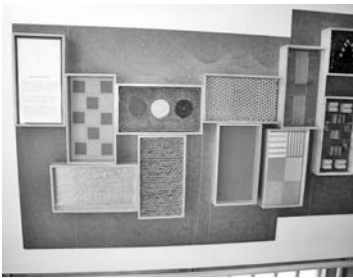
正規教員の賃金は以下のようにになっている。(単位はユーロ)

経年	公立	私立
1	1937.21	1975.51
10	2168.14	2554.61
15	2894.22	2957.95
20	3389.36	3466.97

上記以外に夏冬各1ヶ月のボーナスがある。休暇は5週間ある。15年経つとさらに増え、20年経つとまた増えて7週間程度になる。

なおアシスタントの賃金は少ない。税込み賃金のため、手取りは少なくなる。男性は賃金が少ないため、幼稚園教員になりにくい。

将来は幼稚園と小学校教員、両資格のある人が幼稚園教育を担当することをめざす方向にある。



様々な触覚を味わうコーナー (教員作製)



イースターの飾り (環境構成)

## 7. ペダゴギック幼稚園教員養成校

正式にはBildungsanstalt für Kindergarten Pädagogikder Stadt Wien (幼稚園教育のためのウィーン市立教員養成学校)であり、通称はペダゴギック (Pädagogik) としている。



Pädagogik正面玄関



玄関ホールに置かれた学生の作品（椅子）

### （1）訪問日程

校長は心理学を研究する Mag.Dr Brigitte Cizek さんで、当日同席した教員は他に研修担当教員，教務担当教員，芸術・コミュニケーション担当教員の計4人である。懇談・参観日程は2012.3.20日，9：00～12：00であった。

### （2）ペダゴギック（Pädagogik）の教育

幼稚園教員の養成を行う“基本教育のためのウイーンのセンター”（Wiener Zentrum für Elementarpädagogik）で高等学校と短期大学を連続させた5年制と，短期大学相当の2年制の養成がある。他にも5～7セメスターの転職者受け入れ教育システムもある。

BILDUNG FÜR SCHULUNG UND PRAXIS（学習と実習の教育）を目標として，実践的幼稚園教員の養成を行う。ウイーン市には他に2校キリスト教系の養成校がある。

### （3）ペダゴギック（Pädagogik）の概要

#### ① 5年制の養成（高等学校＋短期大学相当）

各学年100名の定員であるが，途中でやめる人もいて最終学年では70名程度が残る。途中でやめるのは，様子を見て自分に合わないと判断する場合，成果の出ない人などである。現在384人が在籍，うち30名は男性である。各学年3クラスの編成，合計9クラスから成る。



② 2年制の養成（短期大学相当）および5～7セメスター履修による養成

各クラス30人程度，16クラスある．433名のうち男性は39名である．

基本は2年間であるが，前歴によって修めるセメスターが異なる．

他職種に就いた者が幼稚園教員の職を得るための教育システムがある．例えば高等学校卒業後いったん他職種に就き，新たに職を探すあいだ職業安定所を通して週2日市の仕事を充てられた者が，ペダゴギックの試験を受けて合格すれば上記の仕事をしつつ5セメスターの教育を受けて，幼稚園教員の資格を得ることができる．

高等学校を卒業していない者でも，試験を受けて合格すれば7セメスターをかけて学び，幼稚園教員の資格を得ることができる．ただしその場合，通常の学生と異なり夏期の長期休暇は与えられない．

これらのクラスには人を相手にしていた職業（例：理容）を経た人がいる．他国出身者，幼稚園で手伝いをしていた人など様々な経験を持った人が集まっているから成功することも多い．

この養成システムで資格を得た者は少なくとも5年間はウイーンで仕事をするごとが義務付けられている．幼稚園教育を求める子どもの増加に伴って，教員が不足する現状にある．

授業料は無料である．進学する人，近隣へ就職する人もいるのでそのままウイーンに就職する人は60～70%である．



フェルトで制作したかたつむり



染色デザイン作品

### (3) 教育の概要

①教育全般の学び ②幼稚園教育の学び ③実技・実習の学び がある。

実習は3・4・5セメスターで、学校の休みの日に、各自が幼稚園で行う。5年生では5週間続けて4～5時間幼稚園実習を行う。うち、週1回障害をもつ子どもの園へも行く。実習指導のためのスタッフもいて巡回する。

障害をもつ子どもの教育の専門教科を修めるにはあと5セメスター（午後または夜間）取り組む必要がある。

教育の特色は ①絵画、表現、音楽、リズム ②動き、身体表現、運動能力 ③コミュニケーション ④グループを作って遊ぶ活動 ⑤教員との討論、話し合い を重視する。

1コマ50分の授業を組む。学生の学びの意欲は高い。現在約150人の入学希望者が待機している。

### (4) 学生の教育と施設の様子

#### ① 造形、制作、表現に関する教育

芸術、美術に関する教育を重視している様子が伺える。学生の制作したクラフト作品が各所に展示してあった。古タイヤの中央から放射状に紐を張り、丸く編みこんで子どもが座るソファにしたものもあった。腕人形、指人形の制作に取り組む学生の姿もあった。



椅子の制作に取り組む学生



学生の作品

棚には各種造形活動をするために必要な材料、用具が置いてあった。電動のこぎり、ドリルなどの機器が設置された木工製作室もあった。子どもがぐつろいで座るための椅子作りに取り組んでいる学生もいた。

## ② 歌、リズムなど音楽に関する教育

音楽教育は多様に展開されている様子が伺える。参観したのは教師の弾くピアノに合わせて優しい歌声で子どもの歌をうたう授業であった。別室では教師が箱をたたいて出す単調なリズムに乗せて学生が各種ドラム、マラカス、鉄琴などで調和の取れた新たなリズムを作り出す活動をしていた。

空き缶で作るドラム、竹の笛、紙筒のマラカスなど手作り楽器もあって、それらで合奏が行われるようである。



歌の授業風景（1年生）



リズムをつくる授業

## ③ 運動、遊びの指導

天気のよい日であったため、戸外でボール遊びに取り組む学生の姿もあった。2列に並び、ボールを適宜渡すだけの活動に見えたが、ボールと共に各自が考えたメッセージも送っているようであった。このクラスには年齢の高い人（再就職のために学ぶ人と思われる）もいた。体育館ではリトミックなどに取り組むという。



ボールの受け渡しを行う活動



図書室

#### ④ 図書館、フリースペースなどの施設

図書室には各種絵本や専門書などが配架されていた。学生の集うフリースペースや憩いの場所もあり、ビリヤードをする学生の姿もあった。整備された教育環境であった。

#### ⑤ 教員の研究

教員の研究環境も整っている。美術教員は研究室および隣接のアトリエを案内してくれて、自分に取り組んできた研究活動の一端を示してくれた。

この美術教員は描画活動を通して幼児の心の状況を読み取ろうとする研究を重ねている。幼児による多くの描画データをパソコンから取り出して、幼児の状況と絵画表現の関係性を説明してくれた。研究対象は附属の幼稚園（ファミリーグループ）や近隣園から定期的に訪れる特定の幼児が描く絵画を追跡調査している。アトリエを訪れた幼児は自由に遊ぶ。教員も特に何かをするように指導するわけではない。幼児はそのうち自由に描き始める。

その一つの例を示してくれた。初めてアトリエを訪れた時、何もできないで部屋の隅にじっとしていた幼児であったが、しばらくして絵の具に関心を示し、全てを水色に塗った。繰り返し重ねて塗った。この幼児は自分の思いを外へ出すことのできない幼児であった。次に訪れたときにはクレパスで黒く塗った。3ヵ月後には異なる色（赤、オレンジなど）が加わると共に心の解放も見られた・・・というものであった。描くことで、自分の世界に入り、自分を出

すことができたという。家庭環境、友人関係などとも関係付けて分析研究をしている教員であった。



幼児の描いた絵（心理分析研究）



美術教員のアトリエ

#### IV. 調査結果の考察

##### 1. 保育所機能をもった幼稚園

ウィーンには就学前教育・保育施設としては幼稚園だけであり、いわゆる保育所は無い。その意味では日本で今論議されているような幼稚園・保育所の一体化問題は存在しない。

オーストリア全土には8,050幼稚園があり、うちKinndergartenは4,595, krippel,267 (Kinndergartenに含まれる), Hortl,158, 混合1,030になっている。(重複するため合計と一致しない) うちウィーンには1,554園(公立354, 私立1,200)ある。

多くの幼稚園で3歳未満児の保育も行われていた。ペダゴギック幼稚園では3歳未満児が1グループ(人数不明)、私立ライフ幼稚園では1～3歳が4グループ(平均15名)、ウィーン市立幼稚園では0～3歳が2グループ(各15名)あった。他の3園は設立趣旨・役割から、未満児保育は実施していない。

後に項を起こして述べるが、幼稚園で小学生(10歳まで)を対象とした学童保育も行っている。小学生が午後になると幼稚園へやってくる。学童保育専門のホルト幼稚園も視察することができた。これらから考えると、幼稚園機能の多様な実態が理解できる。

隣国ドイツの例なので、適切ではないかもしれないが小宮山潔子(1997)は

「ドイツの幼児教育施設は学校とはみなされていない。それは家庭教育を補完するものとして、社会福祉施設と考えられてきた。管轄面でも、家庭・青少年・社会・健康省の管轄である州が多い」としている。ウイーンの幼稚園もこのような歴史的な流れのなかで保育機能をもってきたと推し量ることができる。

なお、乳児保育を受ける子どもの数は園の規模から考えるとやや少ない印象を受けた。子育ては家庭で行うという考え方があり、社会の制度も整っているからではないかと思われるが、この点については調査できていない。

後にチェコさんから届いた便りには「オーストリアでは産後育児休暇が3年あり、母親が家で子どもをみられるようになっています。母親には育児手当(数年前のデータで)月460ユーロ出ます。また子どもにも一人当たり200ユーロ程度出ます。女性のほうが収入の多い場合、男性が家事・育児をし、休暇が取れますし、休暇を半分半分にするなどいろいろなバリエーションがあります。子どもは国の宝、神からの授かりものというキリスト教の考えがあるのだと思います。ほんとうに女性に優しい社会だと感心した次第です」とあった。

## 2. 異年齢グループ編成

ウイーンの幼稚園は異年齢グループを編成して行う幼児教育・保育が主流である。ペダゴギック幼稚園では3～5歳が4グループ(平均25名)、ライフ幼稚園では1～3歳が4グループ(平均15名)、シュバイツァー障害児幼稚園では3～6歳が9グループ(平均17名/8グループ)、キンダーハウス幼稚園では3～6歳が2グループ(平均17名)、ウイーン市立幼稚園では0～3歳が2グループ(各15名)、3～6歳が2グループ(各25名)であった。唯一、ライフ幼稚園でのみ4歳児クラス25名、5歳児クラス25名の同年齢クラス編成がみられた。一方で私立ライフ幼稚園において3歳児以下は異年齢編成であることから、同年齢編成はむしろ例外的であると考えたほうがよい(表1)。

広瀬俊雄(1994)はウイーンのシュタイナー幼稚園で研修生として継続した調査・研究を行った様子を詳細に報告しているが、その中でも4～6歳が25名、3室に分かれて教育を行っているとしている。

いずれにしてもクラス概念は薄く、生活集団としてのグループのとらえ方が中心になっている。

(表1) 視察幼稚園の年齢区分、グループ編成の様子

幼稚園名	特徴	年齢区分	グループ数	1グループの幼児数	1グループの教員数	学童保育
ペダゴギック幼稚園	公立養成校付属園	3-5歳	4	25人程度	2教員+実習生1-2名	あり
		0-2歳	1	(-)	(-)	
ライフ幼稚園	私立園	1-3歳	4	15人程度	2名	あり
		4歳	1	25人	3名	
		5歳	1	25人	3名	
シュバイツァー幼稚園	公立障害児教育園	3-6歳	8	16-18人(健常2/3)	1教員+2補助教員	(-)
		重症児	1	9人	3名	
ホルト幼稚園	公立学童保育+障害児教育	6-10歳+就学前障害児	2	21人(うち障害児4人)	(-)	あり(34名)
キンダーハウス幼稚園	私立モンテッソーリ教育園	3-6歳	2	14人	1教員+1補助教員	(-)
				20人	2教員	
ウイーン市立幼稚園	公立園	0-3歳	2	15人	1教員+1補助教員	あり(24人)
		3-6歳	2	25人		

\* (-)印は未調査

日本においては異年齢クラス編成を行う幼稚園・保育所は少ない。ほとんどの園が同年齢幼児によるクラス編成を行っている。全国データは不明だが、三重県に181ある公立幼稚園のうち、4・5歳児異年齢クラス編成の幼稚園は11園(うち2園は3歳児も含む)に過ぎない。いずれも1園1クラスの幼稚園であり、平均園児数は15.1人である<sup>(注1)</sup>。この場合異年齢クラス編成を行う理由は園児の少なさからである。一部の保育所においても同様の理由で異年齢クラス編成を行う園もある。これは、同年齢学年でクラス編成を行うほうが、幼児の発達も近似していて望ましいが、幼児数の関係などで止むを得ず異年齢編成にするケースである<sup>(注2)</sup>。

無論、ウイーンの幼稚園はそのような消極的な理由で異年齢クラス編成を取

り入れているわけではない。今回の調査でも全ての園は一室の子ども集団をクラスではなくグループと表現する。Familiengruppe（家族のグループ）として括っていることを考えると、子どもはきょうだいのように異年齢集団で育つのが自然という考えである。年長児は優しさと模範を示し、年少児は年長児に憧れ伸びようとする関係になることが期待されている。キンダーハウス(モンテッソーリ)幼稚園では小さな子の言葉を聞き取ろうと集中して耳を傾ける年長児の姿があり、微笑ましく感じた。

日本においては、幼稚園設置基準第2章第4条「学級の編制」の項で「学級は、学年初めの日の前日において、同じ年齢にある幼児で編制することを原則とする」としている。そのため、幼稚園では同年齢学年で編成をすることが一般的になっている。

極論であるが、ここには均一な発達集団が均一の学びを得ることを前提とした教育観が表れている。ウイーンの場合は異年齢・異質集団であるわけで、個々の学びや多様な学びを重視する教育観にならざるを得ない状況がある。教育の方法・内容については後に再度考察する。

ちなみに日本の私立幼稚園や保育所などでも一部に異年齢教育・保育を積極的（意図的）に導入して異年齢の交流を促す実践をし、成果をあげているところもある。同年齢活動を必要とする場合は別途臨機応変な編成を行って取り組む工夫をしている。

1 グループの担当教員は、いずれも複数であった。幼児数は日本より少ないにも関わらず担当教員は多い。（表1）にあるとおりペダゴギック幼稚園（2教員+実習生1-2名）、私立ライフ幼稚園（3名、うち1名は英語のみを話す教員）、キンダーハウス幼稚園（2教員）、ウイーン市立幼稚園（1教員+1補助教員）という状況である。日本のように一人の教員が20~30人を担当するような園はなかった。

### 3. 昼からは学校を終えた小学生も幼稚園で過ごす

ほとんどの幼稚園では学童保育が行われている。午後になると保育を必要とする6~10歳の小学校児童が幼稚園へやってくる。従って午後は3歳から10歳



までの子どもが各グループで過ごすことになる。昼までで降園する幼稚園児もいるので、グループの人数が増えるわけではないが、教員の子ども対応には苦労があるのではないかとと思われる。

子どもは宿題や好きな遊びに取り組んだり、リラックスしたり、皆で遊ぶなど思い思いに過ごす。ホルト幼稚園のように昼から開設する学童保育（および障害児保育）専門の幼稚園があるのは特筆すべき制度である。このように幼稚園には多様な機能が求められているが、園長は学童保育については今後小学校教育の役割になる検討が進んでいると話していた。小学校教育の課題として考えられていくものと思われる。

#### 4. 障害を持つ幼児、外国からの幼児も共に教育を受ける

異年齢保育が一般的であるウィーンの幼稚園では、軽度の障害幼児は受け入れが進んでいる印象を受けた。またシュバイツァー障害児幼稚園ではよく整った療育環境であり、専門スタッフの配置も手厚いと感じた。なかでも考えさせられたのは、障害児教育専門の幼稚園として、1/3は障害児、2/3は健常児の比率で1グループを構成するという考え方である。多様な子どもが交流を持ち、共に育つという考えが貫かれている。専門教員のレベルも高く、地域の保護者の支持を受け、健常児の入園希望も多いという。日本においても幼稚園・保育所では健常児と共に障害児も過ごす統合保育への流れは強くなっているが、障害児療育機関で健常児も共に過ごすケースはほとんど無いと思われる。検討すべき課題ではなかろうか。

ホルト幼稚園は学童保育と障害児教育を併せ行う午後の幼稚園である。ここでは障害のある幼児の小学校教育への適応促進を目指していると考えられる。

移民の受け入れが進んでいることもあり、多様な国の幼児にドイツ語教育を行うことが重視されている。特にウィーン市立幼稚園では言葉の教育が課題になっていた。

また、給食を提供する園では宗教上の理由などから食事の区別に対応していて、多様な人々に配慮した教育が行われている実態があった。

## 5. 個人の優れた能力を見つけ、伸ばす教育が重視される

日本の教育は全ての子どもに同じような能力を保障しようとする教育の考えが強い。幼児教育の場合は、一人ひとりの発達の状況や興味・関心が異なるため、個に応じた教育を目指す視点がある・・・にもかかわらず、一斉教育の考えに陥ってしまう。それは小学校以降の教育が集団的一斉教育体制になっているため、幼児教育・保育でも最終的にはそこへつなげようとする意識が働いてしまうことによるのではないだろうか。ところが、欧米の教育では一貫して個人の才能を伸ばす教育の考えがある。

このことを端的に表すのは自由に他のグループへ行って活動できるシステムである。子どもは好きな遊びの場へ行って、ままごと、絵画・造形・手芸活動、コンピュータ遊び、遊具の構成遊び、パズル遊び、戸外遊び、教員と行う活動など、好きに遊ぶ。教員はそれぞれの幼児の興味・関心に応じ、その幼児のもつ才能を伸ばすという視点をもって支援を行う。個人の弱いところは援助し、強いところ（才能）がさらに伸びる支援をするという考えに立つ。

その基礎になるのはカリキュラムについての考え方である。「プランはあるが、教員は子どもの様子を見て柔軟な取り組みをする」（ホルト幼稚園長）、「細かな指導計画は立てない、教員に任せている」（ライフ幼稚園長）の言葉にあるように、教育の方法や内容については教員の裁量が大きいと感じられた。それぞれの教員は自分の専門領域（重点的に指導する分野）をもっているように思えた。ゆえに教員はセミナーへ参加するなどの自己研鑽が必須になり、それぞれの専門領域を深める努力をしているという。

また、イースターやクリスマス等の行事以外では、全園での一斉活動はほとんどしない。日本のような運動会・発表会などの継続した取り組みも行われていない。このような状況は日本であれば小学校就学を迎える幼児の育ちの保障や集団性の育成が不十分だとして問題になるであろう。確かにホルト幼稚園では4・5歳児クラス、ウイーン市立幼稚園では一時的に5歳児特別編成を行い、対応している様子がみられた。しかしそれは幼児教育においては例外的な考えのようであった。

## 6. 造形、音楽などの芸術に関する取り組みが重視される

保育室には豆、米、コルクなどの自然素材がタライ状の容器に入れてあり、それをすくったり、落としたり、移し替えたりする遊び環境が多くの子園で見られた。感覚、感触を味わうことや量概念の把握につながると思われる。

造形教育も重視する。和紙のような柔らかな紙に、スポイドでとった色水を落とし、にじみや混色を楽しむ幼児がいた。自由に絵を描く幼児もいた。描いた小作品は、額に入れて飾ってある。手芸も盛んで、30×50cmほどの井形の枠を作り、糸で小さな織物作りに根気よく取り組んでいた。完成した織物は、額におさめて飾ってあった。イースターのシーズンでもあり、玉子を使ったデザイン、飾りに工夫が見られた。

色つきの綿のようなフェルトを利用して、玉子に薄く巻きつけた色とりどりの柔らかな作品が作ってあった。筒状の空き容器は、デザインを施し、保護者連絡用のポストにしてあった。

音楽活動はあまり見る機会はなかったが、キンダーハウス（モンテッソーリ）幼稚園では、教員はギターを弾いて幼児と共に何曲かの歌をうたう姿があった。子どもの歌声は優しかった。ギターの音色の柔らかさ、教員の声の静かさ、子どもの落ち着いた様子なども相俟って、ゆったりと歌うことを楽しむ生活を感じた。

## 7. 子どもの心と発達を考慮した遊具環境、室内環境がある

建物としての施設は、日本のほうが独立性があり、機能的にも優れているように思われる。視察園が都市部の幼稚園であったことによるかもしれないが、商店・民家の立ち並ぶ奥にかろうじて敷地を確保していたり、アパートの一角に園舎をもっていたりする園もあるなど、建物環境はさほど良くなかった。園庭も狭く感じられる。ただ、シュバイツァー障害児教育幼稚園は特別で、緑豊かな広い公園敷地内に、各保育室を独立させた立派な園であった。

しかし、どの園も保育室環境には創造的な工夫があった。ほとんどのグループにはリラックス空間や、小部屋があった。幼稚園は生活の場とする考えの表れかと思われるが、保育室の一角にソファやクッションがあって、ゆったり過

ごすスペースがあったり、物置程度の小部屋が附属してそこで仲間とままごとをしたり、室内に2階部分を設けて、高くなったスペースで小型積み木遊びをしたり、階段下の空間に潜り込んで遊ぶなど、室内環境は工夫されている。

教師のセンスにも目を見張るものがあり、わずかな空間も教師の手によって芸術的な装飾がなされていた。制作材料として準備した空の玉子であっても乾いたわらをかごに敷き、その上にそっと置いてある様子を見ると、自然な感じが漂う。また、教員の手作り作品も多く目にした。手を触れて感覚を楽しむ教具（ウーン市立幼稚園）や乗ってみて足の裏の感覚を楽しむ教具（シュバイツァー障害児教育幼稚園）などで、感覚を育てる教育環境があった。

なお、園庭にはブランコ、総合遊具、砂遊び場、東屋風のベンチ、周回できる三輪車用の道などがある。日本のように運動会や鬼ごっこができるような広い園庭はなかった。キンダーハウス（モンテッソーリ）幼稚園では、別途公園や森、プールへ行くなどして、運動面の活動を補っていると話していた。

## 8. 幼稚園教員養成機関の教育について

養成校における養成システムは多様であり、今回訪問したペダゴギック幼稚園教員養成校でも5年制、2年制、5セメスター制、7セメスター制と学習者の前歴等によっていくつかのコースがあった。

教育内容は音楽教育、造形・工芸・織物に特長があり、芸術文化の伝統を大切にしている教育が行われていると感じた。田中達也（2011）は養成校で所定の教科と教師教育のための必修教科を修め、マトウラ試験（高等教育入学試験、職業ギムナジウム終了試験）に合格したうえで、幼稚園教員になることができるとしている<sup>(注3)</sup>。

幼稚園教員は中学校卒業後5年間の養成システムを経て、資格を得るのが一般的である。ペダゴギック幼稚園教員養成校でも中心は5年制の養成であった。

現場においては園長はほとんどが修士レベルであるが、幼稚園教員は養成校卒業生が主流であり一部に教育大学を経た教員もいるようであった。ちなみに小学校教員は大学（修士以上）修了者である。

## V. まとめと今後の課題

大きな特徴は、就学前教育・保育は幼稚園に集約されていることであった。そのため幼稚園は幼児教育、乳児保育、学童保育、長時間保育、障害児保育など多様な機能をもっていた。一園が全てを行うわけではなく、それぞれ特徴を發揮した教育を行っていた。私立の幼稚園では大学との連携（ライフ幼稚園）、モンテッソーリ教育（キンダーハウス幼稚園）など更に教育特徴を付加していた。

異年齢グループ編成を行うことも特徴である。多様なきょうだいがある家族のような生活を通して学ぶという教育観、個の優れた能力の育ちを支えるという教育観が影響しているものと思われる。子どもは自由な時間はどのグループで過ごしてもよく、それぞれ興味をもった環境の保育室へ行って遊ぶ姿があった。特に造形、描画、工芸などを通じた感性の教育が重視されていた。

園としての全体的な教育のプランはあるものの、教員には各自で保育の方法や内容を決定する自由度が与えられている。教員は専門性を高めるために、セミナー研修などに個人的に取り組む様子が伺えた。

本調査は海外における教育の実態や制度について基礎的な理解の無い状態で実施したものであり、確かな資料とはなり得ていない。今後他の文献と突き合わせることによって、更なる実態把握に努めたい。今回の視察研修で得た事柄のうち日本の幼児教育に生かすことができる部分については検討のうえ、本学学生及び幼児教育関係者へ提案していきたい。

## おわりに

幼稚園・保育所は一人ひとりの健やかな成長を願って遊びや生活を通して子どもの育ちを促している。社会状況が変化の中で、子育てで支援にかかる諸事業の展開が求められ、また一方では早期からの能力開発につながる学習を求める保護者の声などがあり、従来の幼児教育・保育が変化してきた。公立園の統廃合・民営化の流れも強まってきている。このたび幼保一体化への新たな方向性も国が示した。

独自の発展をとげてきた我が国の幼児教育・保育は新たな制度の中で大切に

すべきことは何か。本報告が一部でも参考になれば幸いである。

調査に協力いただいたウイーン市の幼稚園・機関の方々，企画調整・通訳・監修をお世話いただいたミュレッカー夫妻，研修の機会を与えてもらった大学に感謝する。

## 注

1. 三重県幼稚園協会作成の平成22年度「三重県国公立幼稚園一覧」による。
2. 保育所においては子ども一人に対する面積および、一人の保育士が担当できる人数は決められており、その基準を満たしていればクラス（グループ）編成については拘束がない。そのため、園児数が少ない場合は近い年齢をまとめる、保育室の数や広さに限りがある場合は異年齢を同室で保育するなど臨機応変に対応することも可能である。
3. 田中達也「オーストリアの教員養成-総合大学と教育大学の比較を中心に-」  
佛教大学教育学部学会紀要第10号，2011 でオーストリアの教育システムについて詳細に述べている。

## 引用文献

小宮山潔子『第4章ドイツ』，日本保育学会編「諸外国における保育の現状と課題」，世界文化社，1997，p56

## 参考文献

久保由美子『末は博士か-変貌するオーストリアの教育制度-』，広瀬佳一他編著「ウイーン・オーストリアを知るための57章」明石書店，2011

経済協力開発機構（OECD）編，徳永優子他訳「図表で見る OECD インディケータ2010」明石書店，2010

小宮山潔子『第4章ドイツ』，日本保育学会編「諸外国における保育の現状と課題」世界文化社，1997

齋藤純子「ドイツの保育制度-拡充の歩と展望-」国立国会図書館レファレンス，2011.2

白井常『西ドイツ』、白井常「世界の幼児教育シリーズ6」丸善メイツ、1984  
ステファニー・フィーニイ他著、大場幸夫他訳「保育学入門」ミネルヴァ書房、  
2010

田中達也「オーストリアの教員養成－総合大学と教育大学の比較を中心に－」  
佛教大学教育学部学会紀要第10号、2011

広瀬俊雄「ウィーンの自由な教育」勁草書房、1994

福田博子「ドイツの幼児教育施設についての考察」八洲学園大学紀要第5号、  
2009

若山育代「オーストリアの幼児造形教育から学ぶこと－三つのキンダーガルテ  
ンの視察調査から－」ベネッセ BRERD No.13、2008